赤ちゃんの四季（40）　平成22年冬

赤ちゃんと皮膚

医学研究の進歩により、皮膚にはいろんな働きがあることがわかってきました。いま最も注目されているips細胞も皮膚細胞をもとに作成されています。また、外界からの細菌や毒物の侵入を防止するための皮膚における免疫機序も次々と明らかにされています。

私たちの皮膚は、いろんな情報を発信してします。顔の色つやを見るだけで、相手の体調はもとより、感情まで読み取れます。世の女性たちにとっては、皮膚、とくにお顔のお手入れは大変です。女性が追い求めているのは、赤ちゃんのようなしっとりと、きめ細やかな、つるつるのマシュマロのようなお肌だそうです。

赤ちゃんは、まるでラードのような胎脂（たいし）で皮膚を覆われた状態で生まれてきます。胎脂は赤ちゃんのカラダを羊水の刺激から守る働きがあり、産まれてきた赤ちゃんに付着している胎脂は取り除かなくても、数日のうちに、含まれる水分が蒸発し、脂肪分が透明になり、目立たなくなります。匂いも、いやな脂臭さではなく、甘酸っぱい赤ちゃんのいい香りがします。母親のように、ほお擦りしたくなります。

昔は、産まれるやいなや産湯につかり、不浄な胎脂はきれいに落とすものとされていましたが、現在では皮膚を傷つけないために、また感染から皮膚を守るために胎脂をつけたままにします。赤ちゃんが外界での生活に適応してくる生後３〜４日頃に、初めて沐浴（もくよく）するところが増えてきました。

赤ちゃんとお母さん方を最も悩ませるのがアトピー性皮膚炎で、厚労省研究班の調査では、４か月児の12.8％がアトピー性皮膚炎に罹っているということです。アトピー性皮膚炎は、遺伝要因と環境要因が組み合わさって発症する慢性の炎症性疾患で、治療は薬物療法とともに、原因因子、悪化因子の除去が基本になります。寒さに向かう季節になると、空気が乾燥し、アトピー性皮膚炎は悪化します。悪化防止のためのスキンケアとしての基本としては、まず皮膚を清潔に保つことです。角質、皮脂、皮膚の常在菌の代謝産物などによる内因性の汚れ、とくに尿・便や汗、涙、よだれなどによる汚れは刺激性が強いので、毎回よく洗浄しておくことが大切です。